

☒ 平成十九年度

☒ 和歌山信愛女子短期大学附属中学校

☒

☒ 入学試験問題 前期日程

☒ 国語 (60分)

受験上の注意

☒ 一 問題用紙は1～21ページまでです。

☒ 開始のチャイムが鳴ったら確認して始めてください。

☒ 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に記入してください。

☒ 三 終了のチャイムが鳴ったら、問題用紙の上に

☒ 解答用紙を開いたまま裏返して置いてください。

☒ (解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入しなさい。)

受験番号

【二】 次の各問いに答えなさい。

問一 次の①～⑨の——線部のひらがなを漢字に直しなさい。

☒ ① 坂をのぼる。

☒ ② 山にのぼる。

☒ ③ 夏はあつい。

☒ ④ この本はあつい。

☒ ⑤ この問題はやさしい。

☒ ⑥ あなたはみんなにやさしい。

☒ ⑦ 面積をはかる。

☒ ⑧ 時間をはかる。

☒ ⑨ 体重をはかる。

問二 次の①～⑤の対義語を□の中から選び、それぞれ漢字に直して答えなさい。

☒ ① 自然

☒ ② 義務

☒ ③ 整理

☒ ④ 現実

☒ ⑤ 利益

☒ けんり      せんしつ      じんこう      さんらん      りそう

問三 次の①～③の——線部と同じ働きものをそれぞれ後のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

☒ ① 友達はみんな参加するらしい。

☒ ア この車はとてもめずらしい。

☒ イ 母は買い物に行かなかったらしい。

☒ ウ 彼はとても男らしい。

☒ エ スポーツらしいスポーツはしたことがない。

☒ ② 私の描いた絵はこれです。

☒ ア 父の話はいつも面白い。

☒ イ それは楽器の鳴る音だ。

☒ ウ 海で泳ぐのが好きだ。

☒ エ どうして泣いているの。

☒ ③ 教室は静かである。

☒ ア 海はきれいで青い。

☒ イ 母は台所で料理をしている。

☒ ウ あの子と遊んでみる。

☒ エ 弟も来るようである。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

図書館などで、子どもたちが本を選んでいる様子を カンサツ <sup>a</sup> していますと、子どもたちはさし絵を探して丹念に見ていきます。その本が面白そうかそうでないか、それを読もうか読まないかは、絵によって決められるところが大きいようです。さし絵は子どもたちにとって、実に大きい意味もっています。 A 同じ物語だと分かっているにもかかわらず、文庫本のように、文字がつまっているさし絵のまったくない本には、相当年齢が上にならないと手を出そうとはしません。

こうした子どもたちの様子を見ていますと、さし絵のあるなしや、その良し悪しが、子どもが一冊の本を読みたいと思うか思わないかを決めるのに、ひとつの重要な決め手になっていることが分かります。よく引用される言葉ですが、『不思議の国のアリス』の冒頭で、アリスが、お姉さんの読んでいる本をのぞいて言う言葉—— <sup>①</sup>「絵もない本なんて、いったい何の役に立つのかしら？」——は、よく子どもの気持ちを言い表していると思います。

ある小学校で、三年生の子どもにさし絵についてたずねたところ、ほとんど全員が、本にはたくさん絵がついていたほうがいいと答え、その理由として、絵があれば読まなくてもお話がだいたい分かるとか、文章で分からなかったところが絵を見ると分かるとか、登場人物の感じや気持ちに分かるとか、あとで人に話すとき、絵を思い出すとよく話せるとかいうことをあげた <sup>ア</sup> そうです。

これらのことば、字を読むことをおぼえ、かなり字に親しんでいる子どもでも、本を読んで内容を理解したり、物語を自分の心の中で絵にしたりするのに、さし絵に頼っている部分がかかなり大きいということを示しています。年齢が下になればなるほど B 文字になれないうちほど、この傾向は顕著で、文字をもたない幼児では、全面的に絵に頼るしかないということになります。

このように、子どもが本の世界に入るのに、いきなり字の本から入るのではなく、絵の本から入るということは、当然のこと

のようながら、考えてみると、とても面白いことです。よく、ひとりの人間は、生まれてから成人するまでの間に、人類が原始時代から今日に至るまでの間にたどったのと同じ発達の道すじをたどると言われます。<sup>②</sup> 幼児の時代は人類の歴史で考えれば、

まだ文明の発達しない、原始時代に近い時代でしょう。たとえば、フランスにある有名なラスコーの壁画をみてみますと、真つ暗な洞窟の壁に色とりどりの動物や幾何学 モヨウが描かれています。なぜ、このような壁画が描かれたのかは今のところ、はっきりとは分かりませんが、祈りのためではないかとか、情報の伝達のためではないかなどと言われています。いずれにしても、この壁画は神様かもしれない誰か別の相手に何かメッセージを伝える目的で描かれたことに違いありません。人間は、そのころ、まだ文字をもっていませんでした。文字を使いこなす前には、絵でものを理解していたのです。今日わたしたちが使っている文字は、その絵が、だんだん記号化されてきたものだと言われています。表音文字と言われるアルファベットでも、たとえば、Aは雄牛、Bは中庭を表す絵文字から始まったと言われています。それがだんだんと絵の表す意味よりも、音のために用いられるようになって、今日のアルファベットになったのです。

<sup>③</sup> 幼児が、文字を学ぶときにたどる道すじもこれと同じです。たとえば、「ねこ」という字を例にとってみると、子どもは、まず現実の生活でネコを見たり、さわったり、鳴き声を聞いたりします。それと同時に、まわりの大人が、「ニャンコ」とか「ねこちゃん」とか言うのを聞きます。そういう経験をくり返しているうちに、ネコとネコを表す言葉（音声）とが頭の中で、だんだん結びついてきます。しかし、このとき「ねこ」という字を見せても、何の反応も起こさないうち、ところがネコの絵を見ると、すぐ「ニャーニャー」と言ったり「ねこちゃん」と言ったりします。人類がそうであったように、ひとりの子どもも、いきなり実体と記号を結びつけることはできず、絵で実物の代わりをさせる時代を、<sup>c</sup> 経なければいけないのです。

ネコの絵を見る経験をくり返し、その絵といっしょに「ねこ」という文字を見ていると、やがて、こんどは、その文字が絵の代わりをしてくれるようになります。つまり「ねこ」という字を見ただけで、頭の中にネコを思い浮かべることができるようになります。そして、そのような経験をくり返しているうちに、「ね」という字を「ねこ」から切り離して、「ネ」という音を表

すものとして認識するようになり、「ほね」とか「ねる」とかいう字の中に出てくる「ね」を読めるようになっていくのです。

ここで大事なのは、わたしたちは、実物とそれを表す記号（文字）を結びつけることを学ぶとき、その一つ前の前提として、必ず絵でものを考える、ということなのです。具体的なものから出発しないと、抽象的なもの世界へは到達できないということなのです。子どもの時代は、徐々にそれを実現する時代です。C、子どもたちは、具体的に書かれたお話を喜び、本にさし絵を求めます。幼児の時代は、このカテイの出発点、全面的に絵でものを考える時代です。この年ごろの子どもに絵本が必要だということの、第一の理由はそこにあります。

D、よく考えてみますと、「絵でものを考える」のは、必ずしも子どもの時代に限ったことではないように思います。非常に高度に抽象化された数学の世界などは別かもしれませんが、わたしたちは、たいていのことは、頭の中で絵にして受けとめたり、理解したりしているように思います。その映像化を行う際、わたしたち大人は、いちいち、さし絵や写真など、視覚に訴えるものの助けを借りなくてもすみます。それは、わたしたちの中に、これまでにたくわえた経験や知識があり、それらを材料にして、自分で映像を生む能力を、わたしたちが身につけているからです。

しかし、経験や知識も乏しく、言葉もたくさんは知らず、自分で映像を描き出す能力も未発達の子どもの場合は、そうはいきません。どうしても具体的に、そのものを示してくれる絵に頼らざるを得なくなります。ですから、わたくしが、「子どもの時代は絵でものを考える時代」だと言ったのは、もっとゲンミツに言うと、「子どもの時代は、ものごとを絵にして考えるとき、すでに絵になったものの助けを必要とする時代」だと言うことができます。

しかし、ものごとが、自分の直接の経験から遠くなればなるほど、それを絵にして心に思い浮かべることが困難になります。外国の話だとか、昔の話、あるいは架空の世界の物語などの場合がそうです。

けれども、わたしたちは、直接自分の知らない世界のことについても、何らかの映像を描くものです。それはわたしたちが、未知の世界のことについて、間接的に得た知識を持っているからです。つまり、これまでに人に聞いた話、新聞や本で読んだこ

と、見た映画等々の記憶が、わたしたちの中にあるからです。

わたしたちが記憶に求めるこうした視覚上の助けを、子どもたちは絵本に求めているわけです。絵本の絵は、それを読むとき、子どもの助けになるだけでなく、その記憶がずっとあとまでその子の映像づくりに役立つわけです。そのことを考えると、絵本の絵が、正確で美しいことがどんなに重要かわかるでしょう。

ところで、直接自分が知り得る以外の世界について、わたしたちが映像を描くことができるのは、知識だけによるものではありません。想像力の働きにもよります。肉眼ではどうしても見ることのできない人魚でも、心の目に見える姿として映るのは、わたしたちには日常の経験を越えた世界をも描きたのしむ想像力があるからです。しかも、この想像力も、また、絵本の絵によって強められ、育てられるものなのです。

⑤ 幼い子どもにとって、絵は「ほんとうのこと」を意味します。肉眼では見ることのできないものや、現実には起こり得ないことがらも、それが絵で示されると、子どもたちにとっては、それは一つの経験になります。『シナの五にんきょうだい』のお兄さんの絵を見れば、海の水を全部飲むなんてうそでしょうとは言えなくなります。絵が想像上の出来事に確固たる現実感をあたえるからです。

（まつおかきょうこ）  
松岡享子『えほんのせかいこどものせかい』より）

問一 〓 線部 a i e のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

問二 本文中の 

A
---

D
---

 に当てはまる言葉として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二回以上使ってはいけません。

- ア だから      イ しかし      ウ たとえ      エ つまり      オ いわゆる

問三 〓 線部ア「そうです」と同じ働きのものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今にも雨が降りそうです。  
イ そうです。それが正解です。  
ウ あの子は明日も来るそうです。  
エ あの人は近くに座りそうです。  
オ そんなことを言うのはかわいそうです。

問四 ~~~~~線部イ「頼らざるを得なくなります」とありますが、「頼らざるを得ない」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 頼らなければならぬ
- イ 頼ることができない
- ウ 頼らなくてもよい
- エ 頼るかもしれない
- オ 頼るべきではない

問五 ———線部①「絵もない本なんて、いったい何の役に立つのかしら？」という疑問は、どういうことを表していると言えますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 手どもたちは本を選ぶときに、その物語の面白さによって、本を決めているということ
- イ こどもたちは、余白のあまりない、文字が詰まっている本を読むのが得意だということ
- ウ 子どもたちは相当年齢が上になっても、さし絵のまったくない本には手を出さないとということ
- エ 子どもたちは、本の内容を理解したり物を考えたりする際にさし絵に頼っている部分が多いということ
- オ 子どもたちにとってさし絵ばかりの本だけが重要であり、活字の本にはまったく価値がないということ

問六——線部②「幼児の時代は人類の歴史で考えれば、まだ文明の発達しない、原始時代に近い時代でしょう」とありますが、  
が、「幼児の時代」は「原始時代」のどのような点に近いのですか。本文中の言葉を使って十五字以内で説明しなさい。

問七——線部③「幼児が、文字を学ぶときにたどる道すじもこれと同じです」とありますが、その「道すじ」になるように、  
次のア～オを並び替えなさい。

ア 「ねこ」という字を見て、頭の中にネコの映像が浮かぶ。

イ 実物のネコを見て、大人たちが「ねこちゃん」と呼ぶのを聞く。

ウ 「ほね」の「ね」と「ねこ」の「ね」が同じ音声を表す記号であることを知る。

エ 実物のネコを見て、これが「ねこちゃん」と呼ばれるものであることを知る。

オ ネコの絵を見て、これを「ねこちゃん」と呼ぶことができる。

問八——線部④「わたしたちは、直接自分の知らない世界のことについても、何らかの映像を描くものです」とありますが、  
どうしてこのようなことができるのですか。それぞれ三十字以内で二か所ぬき出しなさい。

問九——線部⑤「幼い子どもにとって、絵は『ほんとうのこと』を意味します」とありますが、この一文にこめられた筆者の考えはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 目に見えないものが描かれた絵であっても、それを現実として理解しながら思考力を発達させる子どもにとって、読書の習慣を身につけることは大切であるということ

イ 絵を通して物事を理解する段階を完全に卒業した大人と違い、幼い子どもは絵を通してしか世界を理解できない以上、絵は子どもに必要なものであるということ

ウ 絵によって現実を理解する子どもたちは、理解力が大人に比べて未発達であるため、現実と見たことのない架空の世界の区別があいまいであるということ

エ 子どもは絵本の絵が正確で美しいときに限り、その絵を一つの現実のものとして記憶し、大人になって物事を考える時の映像作りに役立っているということ

オ 自分の日常から遠く離れた出来事を描いた絵でも、子どもにとっては現実のこととしてとらえられ、世界を理解していくための重要な経験となって蓄積されるということ



「修坊、おれはどうしても将来漫画家になるんだ。手塚治虫とか、馬場のぼるのような漫画家になって、稼ぎたいんだ。それに漫画を描く道具がなければな」

修は勉がうらやましかった。勉には父親の絵を描く才能の血が流れていた。小学校や中学校の テンランカイで、勉の絵はしばしば金賞とかをとっていた。修が見ても、勉の絵は他の生徒よりも絵の具の使い方はうまいし、人物や事物が綺麗だった。父親の描く絵よりもうまいような気がした。

それに対して、修はこれまで絵描きの子だというのに絵で賞状をもらった覚えは数えるほどしかなかった。描く絵も拙く、自分でも絵の才能はないと分かっていた。自分は母親の 血筋を引いているのだ。だから、修は自分のできないことを簡単にやってみせる勉が誇らしかったし、尊敬もしていた。

「兄ちゃんこれからどうすんだ？」

修は勉を見上げた。太陽がだいぶ西に傾き、愛宕山系の山裾にかかりはじめていた。夕食までには良江の許に帰らなければならない。だが、便所の窓から逃げ出したと分かったら、良江はますます  カンシヤクを起こすに違いない。どうみても、このままでは済みそうになかった。

勉はズボンの裾にこすりつけ足の裏を拭って下駄を履いた。

「修坊、これから、おれはしばらくケンちゃんの家にも泊めてもらうつもりだ。あそこの姉さんは良江婆あと違ってやさしいからな。このことは母さんにも内緒だぞ」

ケンちゃんは勉の親友だった。同じN中学の同級生で、桶屋の息子だった。

勉が立ち上がった。

「オサム、それから、一つ大事な秘密があるんだが、おまえ、聞いても黙っていると約束できるか？」

「うん」修は秘密の聞きたさ一心でうなずいた。勉は恐い顔で修を睨んだ。

「オサムはすぐ良江や母さんに喋るからなあ」

「喋んね。約束すつぺ。指切りゲンマンだ」

修は小指を立てた。勉は辺りを見回し誰もいないのを確かめた。

「おれ、家出しようかと思っっているんだ」

②「家出？ 家を出て、どうすんだ？」

「東京へ行く」

「父ちゃんのとこさか？」

「馬鹿。そんじゃ、すぐに母さんや良江ちゃんにも分かってしまうじゃないか。おれは上京して、手塚先生の許に行つて弟子入りすんだ」

「手塚治虫の弟子になんのけ？」

修は目を丸くした。手塚治虫の名前は漫画本や雑誌でよく読んで知ってはいたが、はるかに雲の上の人のようにしか思えなかった。その手塚治虫の弟子に勉がなるということで急に身近な人間に思えてきたのだった。

「そんな簡単に弟子にしてくれんのけ？」

「わかんねえ。それには、先生も認めてくれるぐらいに、漫画の絵がうまくなければな。だから、漫画を描く練習をしなればならないんだよ。修坊、おれはそのために着々と準備してるんだ。いいな。内緒だぞ。これは男の約束だぞ」

③修はこつくりとうなづいた。

「でも母ちゃんや良江ちゃんが悲しがんねえかな」

「ない、ない。母さんも良江も、修坊がいれば平気だ。良江なんか、おれが居なくなると、せいせいするって、いつもいつてる

だろうが」

勉は修の頭を軽く叩いた。勉の横顔に  がよぎるのを修は感じた。勉は自分自身を励ますように、わざと元氣のあ  
る声をあげた。

「じゃあ、行ってくらあ」

「本当にケンちゃんの所に泊まってくんのけ？」

「そのつもりだ。泊めてくれればな。良いか、誰にも黙ってんだぞ」

勉は小道を駆け出し、N町に向かう県道に走って行った。修は心細い思いを抱きながら勉の後ろ姿を見送った。

勉は夕食が済んで、母が帰る時刻になっても戻って来なかった。良江ははじめこそ、「あの不良が」と勉の文句をいっていたが、時間がたち、夜が更けて行くにつれて落ち着かなくなってきた。

良江は盛んに修に向かい「兄ちゃんがどこへ行ったか、知っていたら教えて」と訴えていたが、修は男の約束を守って「知らない」といい続けた。レオが吠え声をたてたり、家の外を通る人の気配がすると、良江は内職の縫い物を放り出して外に飛び出して行く。修はそんな良江の様子に、嘘をついている <sup>④</sup> 自分が後ろめたくなった。

母が帰ってきた時には、良江は涙ぐみそうになりながら、勉を懲らしめるために便所に閉じこめたいきさつを話していた。母は心配するどころか、反対に笑い出した。

「良江ちゃん、心配することはないよ。行く所なんか、友達の所以外に、ないんだから。そのうち、こそこそと帰ってきてごめんなさいと頭を下げるに決まっているんだから」

「そうかしら。勉は私に叱られたのが怖くて帰れず、うろろうしているうちに車にはねられたり、悪い仲間連れられて行ったんじゃないかって……」

修は母よりも良江の方が勉のことを気にかけているのを見て、意外だった。母はにこにここと笑い、台所から気付く梅酒を持ってきて良江に飲ませたりして、まるで頓着しない様子だった。母は修に勉の行き先すら聞かなかった。

母から真剣に問いつめられたら、修は勉が健ちゃんの家に行ったことを白状しようと覚悟をしていただけに、<sup>⑤</sup> 思わぬ事態に拍子抜けしてしまった。

修が床につき、しばらくたつたことだった。誰かが玄関先に来た気配があった。修は目をこすりながら身を起こした。レオが甘えた声で吠えていた。女の人の声が聞こえた。玄関先に出た母と良江が盛んに札をいつている。修は寢床を抜け出し、玄関先の障子の陰から外を見た。

暗闇の中に、はっとするように白いブラウスにロングスカートの女の人が立っていた。健ちゃんの姉の恵子だった。

「……心配するから、今日は帰りなさいといって、連れて来たのです。勉ちゃんも心から反省してるそうですから、どうか許してやって下さい」

恵子は深々と頭を下げた。恵子の脇に、 神妙な顔の勉が立っていた。恵子が勉の頭を手でちよんと突くと、勉は人形のようにぎこちなく頭をちよんと下げた。

「ごめんなさい」

勉の後ろに自転車を支えた健ちゃんの顔もあった。良江と母は恵子に恐縮し、しきりに頭を下げていた。

修は欠伸をしながら、寢床に戻つてもぐりこんだ。玄関先では女たちのお喋りが続いていた。修は天井板のフシ穴を見上げながら、野球選手になって、川上のいる巨人ジャイアンツを打ち負かす空想にふけた。

夜のしじまをぬって、蛙の泣き喚く声が響いていた。

問一 〓 線部 a i e のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

問二 〓 線部 I 「カンシヤクをおこす」、II 「神妙な」の意味として最も適當なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

I 「カンシヤクをおこす」

- |   |        |
|---|--------|
| ア | 思い悩む   |
| イ | あわてる   |
| ウ | びっくりする |
| エ | 腹を立てる  |
| オ | 心配する   |

II 「神妙な」

- |   |       |
|---|-------|
| ア | 不思議な  |
| イ | すなおな  |
| ウ | 平気な   |
| エ | ふきげんな |
| オ | 悲しそうな |

問三——線部①「漫画を描く道具を買ったんだ。……どうしても必要なものだ」とありますが、この部分における、勉の心情はどのようなものですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 給食費をごまかして漫画を描く道具を買ったことを弟に知られ、弟に対する恥はずかしさのあまり顔をまともに見られな  
いでいる。

イ 漫画を描く道具を手に入れた手段を反省しながらも、夢の実現のためには仕方がないと強い口調くで自分に言い聞かせて  
いる。

ウ 自分のやってしまったことが悪いことだという自覚がなく、欲しかった漫画を描く道具を手に入れた満足感にひたりき  
っている。

エ やつとのもので手に入れた漫画を描く道具であるが、その手段のことを考えると恐こわくなり、弟に話すことで楽になろう  
としている。

オ 高価な漫画を描く道具を手段を選ばず手に入れた喜びでいっぱい、それを弟に自慢まんしたくてたまらない気持ちになっ  
ている。

問四——線部②「家出？ 家を出て、どうすんだ？」から——線部③「修はこっくりとうなずいた」までの修の心情を説明したものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の夢を熱く語る兄の様子にそこまで思いつめていたのかと驚くとともに、今まで感じたことのない兄への尊敬の念がだんだんとわきおこっている。

イ 兄のきびしい口調の中にただならぬ決意を感じ取り何も言えなかったが、とてつもなく大きい兄の話の内容に不安を抱き心配している。

ウ 家出という兄の言葉に今までの兄との楽しい日々が終わってしまうのだと感じ、これからは自分がしっかりしなければいけないと決意を新たにしている。

エ 家出という兄の言葉や手塚治虫という言葉など現実離れた話に驚きはするものの、尊敬する兄の言葉なので、とりあえず納得している。

オ 身近に感じていた兄の存在が家出により遠ざかってしまうことに不安を感じているが、兄の夢を応援したい気持ちでいっぱいになっている。

問五 本文中の  の中に当てはまるものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 不吉な予感
- イ 寂しげな影
- ウ 憎しみの色
- エ 不敵な笑み
- オ 希望への光

問六 本文中に登場する「良江」はどのような人物ですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 曲がったことが嫌いで、筋の通らないことを決して許さない正義感にあふれた人物
- イ 時にはきびしい態度をとるものの、弟の将来の夢には理解を示すおおらかな人物
- ウ 家族の前では、心配事があっても何事もなかったように明るくふるまうほがらかな人物
- エ 弟への怒り、心配などその時々感情が高まると手のつけられない気性の激しい人物
- オ 間違ったことに対してはきびしい言動をとることもあるが、根は弟思いのやさしい人物

問七——線部④「自分が後ろめたくなかった」とありますが、これはなぜですか。四十字以内で説明しなさい。

問八——線部⑤「思わぬ事態に拍子抜けしてしまった」とありますが、これは修のどういう状態を言っているのですか。「思わぬ事態」の内容をふまえて四十字以内で説明しなさい。

問九 この小説についての説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 漫画家になるための家出が失敗することを通して、勉が世間のきびしさを知り大人へと成長する様子が描かれている。
- イ 兄の勉が家出するという事件を通して、修が家族の大切さを理解していく大事な一日の様子が描かれている。
- ウ 兄の子どもらしい無鉄砲さと、それをそれぞれの立場からやさしく見守る家族の様子が弟の視点を通して描かれている。
- エ 母や姉の反対を押し切り、自分の夢に向かって進むとする冒険的な兄弟の行動が、方言をまじえて描かれている。
- オ 子ども達が持つ夢への強いあこがれと、それを積極的に応援する家族の強いきずなが、季節感をまじえて描かれている。

- 【二】問一 ①上(る) ②登(る) ③暑(い) ④厚(い) ⑤易(しい) ⑥優(しい) ⑦測(る) ⑧計(る) ⑨量(る)
- 問二 ①人工 ②権利 ③散乱 ④理想 ⑤損失 問三 ①イ ②イ ③ア

- 【三】問一 a 観察 b 模様 c へ d 過程 e 厳密 問二 A ウ B エ C ア D イ

問三 ウ 問四 ア 問五 エ

問六 絵でものを理解するという点。 問七 イ↓エ↓オ↓ア↓ウ

問八 未知の世界のことについて、間接的に得た知識を持っているから・

日常の経験を越えた世界をも描きたのしむ想像力があるから 問九 オ

- 【三】問一 a 展覧会 b ちすじ c さか(んに) d けはい e しょうじ

問二 I エ II イ 問三 イ 問四 エ 問五 イ 問六 オ

問七 良江が本気で心配しているのに、自分は兄のことを知らないとうそをついていたから。

問八 予想に反して、母が兄のことで真剣にならない様子を見て力が抜けてしまった状態。 問九 ウ